

第40回 中区明るい選挙推進作文コンクール

入

賞

作

品

集



中区明るい選挙推進協議会



第40回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に199作品、小学生B部門(4～6年生)に473作品、中学生部門に58作品、合計730作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区長により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/>

目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・金賞（中区長賞）	わたしのまちのたからもの	北方小学校	一年	大熊 あさひ	1
・銀賞	なつのほんもく	間門小学校	一年	今村 梨緒	2
	大すきな楽しいおまつり	間門小学校	三年	田島 希々花	3
・銅賞	キラキラ光るマリントワー	北方小学校	二年	建部 楓	4
	わたしのすきなところ	間門小学校	一年	廣瀬 菜桜子	5
	わたしのすきなせんとう	横浜雙葉小学校	二年	山岡 こと葉	6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）	だれもが安心して過ごせる町づくり	間門小学校	五年	小野 凜穂	7
・銀賞	未来へ続けるおもい	間門小学校	五年	上関 太雅	8
	言葉のバリアフリーと少しの勇氣	間門小学校	五年	柳内 源万侶	9
・銅賞	ゴミの広がり防止作戦	横浜雙葉小学校	六年	朝倉 嘉音	10
	一人一人の心があたたかい町へ	間門小学校	六年	石田 紬	11
	障害の壁	立野小学校	六年	長谷川 楓	12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）	変えたい未来	仲尾台中学校	二年	嶋本 咲花	13
・銀賞	明るい未来のために	横浜雙葉中学校	三年	石井 凜	14
	投票の意味	横浜雙葉中学校	三年	中島 由佳	15
・銅賞	選挙への一歩は四年後の私へ	仲尾台中学校	二年	飯嶋 柑音	16
	「一票」の重み	横浜雙葉中学校	三年	岩田 澄夏	17
	選挙のためになすべき事	仲尾台中学校	三年	斎藤 ほの花	18

小学生A部門

☆☆☆ 金賞 (中区長賞) ☆☆☆

「わたしのまちのたからもの」

北方小学校

一年

大熊

あさひ



わたしは、じぶんのすんでいるきたがたちようがだいすきです。どうしてかという
うと、しぜんがたぐさんあるからです。

おじいちゃんといぬのさんぽでおるみちには、さかやこうえん、ながいかいだ
ん、たぐさん木もあります。ふじさんがみえるばしよもあります。とくにだいすき
なばしよは、さんぽのとちゆうにあるワシンガかのわき水です。この水は、さわる
ととてもつめたいです。わたしは、いつものみたくなるけれど、おじいちゃんが、
この水はのめないんだよとおしえてくれました。

このわき水はむかしから、おふるやトイレ、せんたくにつかわれていたそうです。
むかしは、のむこともできたのでいいなあとおもいました。おじいちゃんも、こど
ものころからつかっていたそうです。おじいちゃんはいま八十さいなので、むかし
からずっととまらずになれているなんてすごいとおもいました。

まえにテレビで、じしんのニュースをみました。そのとき、水がつかえなくなっ
てこまっている人がたぐさんいました。だから、わき水がここにもあればいいなと
おもいました。もし、わたしのまちにじしんがきて、水がとまったら、たぐさんの
人がわき水をつかえてうれいとおもいます。

いつもこのワシンガかのわき水のまえをとおると、とてもきれいにしてあります。
それは、ちかくにすんでいる人たちが、まいにちきれいに、そうじをしてくれてい
るからです。わたしたちもきれいにつかわなきやいけなとおもいました。

わたしがおばあちゃんになったときも、まだわき水がのこっているといいなとお
もいました。みんなでたいせつにつづきたいです。

むかしからあるこのわき水は、このまちのたからものです。

〈講評〉

身近な場所にある湧水を通した、筆者と家族との温かな交流が目に見え、湧水
の今昔や湧水への思いが素直に伝わる素晴らしい作文でした。また、湧水が町で愛
されていることを「このまちのたからもの」という素敵な言葉で表現するとともに、
筆者の被災者への優しさや、この町に住み続け、湧水を守る町の人たちへの感謝の
気持ちがよく書けていました。

中区は都心部にありながら、多くの自然、湧水が残っています。未来へこの豊か
な自然、湧水を残すため、「みんなでたいせつにつづきたい」という気持ちを大切
にしていってください。

☆☆☆銀賞☆☆☆

「なつのほんもく」

間門小学校 一年 今村 梨緒

わたしは、ほんもくというまちにすんでいます。なつになると、いろいろなイベントやぎょうじがあります。まずさいしょのたのしみは、なつやすみにはいつてからすぐに、ちょうないのこうえんでラジオたいそうがあります。あさはやくてねむいひもあるけど、あさからおともだちにあえたり、けいひんがもらえるからのしみのひとつです。そしてさんけいえんというところは、「かんれんえ」というあさはよいじかんに、さいたばかりのハスのはなをみたり、ハスのはつぱやくきをつかっているいろなあそびができたり、しゃぼんだまもできてたのしかったです。

8がつになると、「ほんもくまつり」と「ぼんおどり」があります。おまつりは、2かかんほんもくじんじややしようにんがいにえんにちがでていて、いろいろなゲームやヨーヨー、きんぎょすくいもできてとてもたのしいです。ぼんおどりは、みんなであわせておどったりかきこおりをたべながらみたりとてもたのしいのでまいとしたのしみです。つぎに、まいとしたのしみののが「おみこし」です。ちようないでみんなおなじはつびをきて「わっしょい、わっしょい」とこえをけながらちようないをまわります。とてもあついいじかんなのであせびっしりになるし、とてもつらいけどきんじよのひとたちが、みずをまいてくれたりホースでみずをかけてくれるのがすごくきもちがよくてまたがんばろうというきもちになります。まいとしいこのゴールまでいくと、おいしいおにぎりやきゅうりをたべさせてもらえてそのごはんがとくべつおいしくかんじます。がんばったけいひんのおかしぶくろがもらえるのもたのしみのひとつです。ことはコロナウイルスでたのしみに行っているイベントやぎょうじがなにもないのがとてもざんねんでした。らいねんは、わたしのすきな「なつのほんもく」ができるように、はやくにちじようにもどってほしいとおもっています。

〈講評〉

自分の住む大すきな町のよいところを、「なつ」というキーワードで綴っていくことで、全体の文脈がすっきりとして読めるのが、この作品の優れているところです。また、朝眠い気持ちやおみこしをかついでつらい気持ちを乗り越えられる理由を、友達や町の人の応援のおかげと感じて、改めて自分の住む町のよさを実感していることが伺えます。「なつのほんもく」を毎年感じることで、きっと毎年の自分の成長を感じていくのでしょうね。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「大すきな楽しいおまつり」

間門小学校 三年 田島 希々花

わたしは、小公園で毎年行われるおまつりが大すきです。公園は小さいけれど、夏まつりやもちつき大会が行われます。

まつりばやしの音色が聞こえてきたら、わたしの心はうきうきしてきます。おみこしがはじまる合図です。根岸町内を山車の後について歩きます。

「わっしょい、わっしょい」

と、大人も子どもも元気いっぱいのかげ声です。あつくてくじけそうになりますが、歩道からのおうえんと、うち水やつめたいのみ物のおかげでさい後までがんばれます。夕方になるとあたりには、やきそばややき鳥のおいしそうなにおいがしてきます。わたしは、かき氷をかならず食べます。なぜなら、おまつりの時にしか食べさせてもらえないからです。ヨーヨーすくいやスパーボールすくいもあつて友だちとどれだけとれたか見せ合います。日がくれても友だちに会えるので、夏まつりはとくべつな日です。

もちつき大会は、実さいにもちをつくことができます。つきたてのもちにきなことおんこをまぶして食べます。おもちを食べる時、のどにつまらないか心ばいだけです。だけど、おいしいので、よくかんでたくさん食べます。おもちのほかに、あつあつのとんじるとじやがバターもあります。どれもおいしく大人気です。わたしがおかわりしたいと思うころには、もう売切れています。

このように、公園は小さくても地いきの人たちのきょう力で、小さな子どもからお年よりまでみんなが楽しめるおまつりができるのはすごいと思います。今年はおまつり前の公園の草かりがなかったので、中止なのかなと気になっていました。中止が決定したと聞いた時は、ざんねんな気持ちでした。来年、おまつりがあるのなら、公園をきれいにしておまつりにもかならず行きます。みんなが元気になるおまつりを、二年分楽しみたいです。

〈講評〉

自分の町のおまつりや地域の行事を題材にした作文はたくさんありましたが、特にこの作品は、まつりばやしの音色、元気いっぱいの掛け声、焼きそばや焼き鳥のおいしそうなにおい、などの情景描写が豊かに丁寧に書き込まれていて、臨場感にあふれていました。また、このおまつりやこの地域、この地域の人を、筆者が誇りに感じている描写が、様々な形で出てくるところも秀逸です。きっと、この公園や祭りを、筆者も大事にしていこうという雰囲気は何えました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「キラキラ光るマリインタワー」

北方小学校 二年 建部 楓

わたしのいえのげんかんのドアをあけるとみなとみらいのかんらん車、ランドマークタワー、山下公園、マリインタワーが見えます。その中でも一ばんすきなたてものは、マリインタワーです。いまは、こうじ中でシートにおおわれているのが、さんねんです。

わたしがマリインタワーをすきなりゆうは、夜になるとマリインタワーがいろんな色に光るところです。とくにわたしがすきな色はむらさき色です。夜に見るととてもしんぴてきです。ほかにはにじ色に光るときがあります。いつも見ているのにまい回きれいだなと思います。

マリインタワーを見て思いだすのはほいくえんのことです。まい日のように山下公園へおそとあそびに行っていました。お友だちとあそんだこと、大すきな先生とあそんだこと、ほいくえんのお兄さん、お姉さんに、あそんでもらったことです。小学校にあがってほんくえんのころのお友だちがとてもなつかしいです。

こんな思いでがいっぱいマリインタワー。オリンピックが日本でかいさいされることになって、とても多くの人がかんこうにきて、もつとゆうめいになると思うとうれしいです。コロナウイルスが世界でりゆうこうして、オリンピックかいさいが少し先になりました。でもかならずオリンピックがかいさいされることを心からいのつています。そのとき、またキラキラ光るきれいなマリインタワーを日本にやってきました、たくさんのがいこく人の方に見てもらいたいです。そのために今こうじ中のシートの中で、さらにきれいに生まれかわっているのだと思います。

オリンピックのかいさいでおひろめになるあたらしいマリインタワーを見ること
が、ほんとうにわたしはたのしみです。

〈講評〉

世界中の人が訪れるみなとみらいの観光地ですが、作者にとっては幼いころからの思い出の詰まった場所や風景であることが、よく伝わってきます。大すきなマリインタワーが工事中であることから、これからもこの街の誇りとして、未来へつなげていく建物にしたいと、思いが広がっていく部分がとても素敵です。自分の未来への希望と、マリインタワーや横浜の未来が重なって、わくわくする内容になっています。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「わたしのすきなUJI」

間門小学校 一年 廣瀬 菜桜子

わたしは、まかどしようがっこうのいちねんせいです。わたしは、まかどしようがっこうがだいすきです。

にゆうがくしてべんきようがはじまり、さんすうがすきになりました。きゆうしよくでは、いままでたべられなかったものがたべられるようになりました。たくさんのおともだちもできて、むしとりやドッジボールをあそぶことがたのしいです。たのしいことはたくさんあるけれど、いちばんすきなところは、まかどのもりとすいぞくかんです。

まかどのもりには、すべりだいやまかどベイブリッジというゆうぐがあります。ターザンロープがにんきで、わたしもだいすきです。わたしはよく、かぞくとさんけいえんにいきます。こいにえさをあげ、てんぼうだいにいき、むかしのいえをみます。まかどのもりはそのさんけいえんにつづいているそうです。それをおしえてもらったとき、とてもおどろいて、ふしぎなきもちになりました。

すいぞくかんは、アカウミガメのみみちゃんやサメ、ナマコ、ヒトデ、ミヤコタナゴなどたくさんのおいきものがあります。わたしのおじいちゃんはこのすいぞくかんのおてつだいをしています。おじいちゃんがまかどしようがっこうにかよっていたころは、こうていのさきがすなはまであみだつたそうです。おじいちゃんはさかなをつかまえたりしてべんきようしていたたのしさを、わたしたちにもしつてほしいとおもっておてつだいをしているそうです。おじいちゃんのはなしをきいていて、さかなをとつてくれるひと、かいすいをとりかえてくれるひと、いろいろなひとがいてすいぞくかんはできているんだなあとときぎきました。わたしたちがさかなをみて、たのしめるのは、たくさんひとがわたしたちのことをかんがえててつだってくれているからです。これからも「ありがとう」のきもちをわすれずに、たのしくがっこうにかよいます。

〈講評〉

今年から小学校に入学して、どんなことにもやる気いっぱいな筆者の気持ちがいますぐに伝わってきます。この作文が優れているのは、自分の大好きな学校が、学校の周りの公園や周りに住んでいる人と、つながっていることに気づいているところだと思います。自分のおじいちゃんが間門小学校の卒業生であることから、町の昔の姿にまで思いが及んでいるのも素晴らしいです。ぜひ、大人になっても、孫ができて、間門小学校を大切に思い続けてほしいです。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「わたしのすきなせんとう」

横浜雙葉小学校 二年 山岡 こと葉

わたしの家ぞくは、よく大和町のせんとうに行きます。いなりゆというせんとうで、おゆが黒いおんせんなのがとくちょうです。

黒さは、おゆに入ると自分の体が見えなくなるくらいです。おんどけいは52どになっでいて、こんなにあついおゆに入れたとおどろいたけれど、じつはおんどけいがこわれていて、本当は42どだそうです。入った日は、ひぎのせい長つうや母のかたこりもなおります。

いなりゆのおじさんは、わたしが行くといつも、「どうぞのんでいって。」

と、コーヒーぎゅうにゆうをのませてくれます。とてもおいしくて、うれしいです。

天じようにはシャンデリアが下がっています。むかしは一日に百人も人がきていたので、シャンデリアをつけていたけれど、くる人がへってしまったので、つけなくなったそうです。わたしが

「このシャンデリアはまだつくのですか。」と聞くと、

「まだつくから、つけてあげようか。」とつけてくれました。シャンデリアはきらめいていて、シンデレラの絵本に出てくるシャンデリアにっていました。

家の近くには、もう一つ、さくらゆというせんとうがありました。小さいころは、さくらゆに行き、近じよのおばあさんたちに体をあらったりふいたりしてもらったそうです。でもおとし、しめてしまいました。家におふろがつくようになり、おきやくさんがへって、せんとうもへっているそうです。

たしかに、せんとうで子どもに会うことはすくなくて、さみしいです。今後、たくさんの人に、いなりゆやほかのせんとうに行つてほしいです。むかしのようになり一日に百人の人でにぎわつてほしいです。わたしはせんとうが大好きです。

いなりゆにポスターがはつてあります。「長生きしたけりやせんとうだぜ。」

〈講評〉

人々の暮らしぶりが変わり、街中の銭湯はめつきり少なくなりました。けれど、確かに昔は、毎日たくさんの人々が利用していた、街のみんなの大事な場所でした。銭湯のおじさんと作者の、コーヒー牛乳やシャンデリアを通じたやりとりは、年齢を超えて、誰もが憩いの場にしてきた当時の雰囲気が見え、温かな気持ちになります。この先も、時代が変わつて無くなつていくものはたくさんあると思いますが、街の人たちの気持ちは受け継いでいけるとよいですね。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞 (中区選挙管理委員会委員長賞)

☆☆☆

「だれもが安心して過ごせる町づくり」

間門小学校 五年 小野 凜穂



私は自分が住んでいるこの町が、気に入っています。友達といつも遊ぶ公園では、花や木がきれいに植えられています。春には、桜が満開でお花見を楽しんでいる人もいます。遊具も安全に作られています。私たちは、安心して遊ぶことができます。バスも電車も通っていて、行きたいところへ自由にいきます。

私はこのように住みやすいと思っていますが、果たしてだれもが幸せに暮らしているのでしょうか。

最近、私の使っている通学路に自転車せん用の道ができました。この道がないときは歩道がせまくて、自転車と人がぶつかりそうな時がよくありました。実際、私が学校に行く時も、自転車に乗っている人にはじをよるようになって、あぶななことがありました。自分が自転車で通る時も歩いている人にもぶつかりそうになって、あぶななことがあります。このように、だれかの困った気持ちや、あぶないと感じたことをきっかけに、よりよい町は、作られていくのだと、思います。

また、まだまだ私たちが気がつかないだけで、安心して過ごせていない人は、他にもいると思います。

たとえば、赤ちゃんをつれている人が、ベビーカーをおして、だんさがあったり、ひっくりかえしそうになったりするのを時々見かけます。かいだんしかないところでは、荷物とベビーカーを持って、歩くのが、すごくたいへんそうです。このように、困っている人を見ると、もっと安心して移動したり、歩いたりできるようになればいいのと思います。前にくらべると、エレベーターができたり、歩きやすい道になったりしていますが、まだそうでないところもあります。私たちにできることは少ないかもしれませんが、やさしく声をかけたり、通りやすいように、道をあけてあげたりすることは、できます。

このように、私たちの町が、だれかの「困った」をかいけつしながら、よりよくなつてきているのは、町じたいが、より安全に過ごせるようになってきていることと、私たちの気持ち、あなたがたくやさしくいることで、成り立つのだと思います。

だれもが安心して過ごせる町づくりのために、これからも困った人のことを考えて、しんせつにしていきたいと思いました。

〈講評〉

普段、通学路で自転車と人との「危ない」感じ取り、周りを見れば段差のある道で苦労された人がいる事にも気がつき、筆者の困った人への気持ちに立ち、優しい心遣いが誰もが安心して過ごせる町づくりの第一歩となる思いが伝わってくる作文です。

物のバリアフリーをなくし、心のバリアフリーを取り除く事が大切ですね。

筆者の作文に込めた思いが大きく広がり、優しさが誇れる中区にしていきたいですね。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「未来へ続けるおもい」

間門小学校 五年 上関 太雅

ぼくは、今回のテーマである「より良いまちをつくるために私たちにできること」を考えたとき“良いまち”とはどんなものだろうと思いました。みんなが思う“良いまち”とは、「安全なまち」「便利なまち」「景色が美しいまち」「清潔できれいなまち」など考えると思います。だけど、みんなが理想に思う“良いまち”は一緒なのに、日本だけではなく、世界には色いろなまちがあります。みんな“良いまち”よりも“住みよいまち”と考えているのではないのかと思いました。便利を一番に考える人、自然がいっぱいある景色を一番に考える人、ボランティア活動などが大変だけど清潔できれいでいることを一番に考える人など、みんなが一番に思うそれぞれの“住みよいまち”が違うのだと思いました。ぼくは、みんながいいなと思う“良いまち”は神様だって作るのがむずかしいんじゃないかなと思ってしまうました。

ぼくは、ぼくの住んでいる本牧のまちが清潔できれいなところや、三ヶい園や八聖でんなど歴史的建ぞう物があるとところや、公園や自然がたくさんあるところが好きです。また、地域の方がたもやさしくて、みんなあいさつをしあえる関係も大好きです。だけど、どうしてこのぼくの好きなまちはずっと続いているのだろうと考えました。毎朝ぼくが学校に行く時、家のまわりや近くの道をそうじしてくれている地域の方がたがいます。そして、ぼくが近所のおじさんやおばさんにあいさつをすると「いつてらっしゃい。」と笑顔で見送ってくれます。公園にあそびに行った時は、花だんの花をきれいにしてくれている地域の方もいました。ぼくが大好きで“良いまち”と思っていたものは、地域の方がたに守られているからこそ続いているのだということに気付きました。そしてぼくも、この地域の方のおもいをつないでいかななくてはならないと思いました。

みんなが理想とする“良いまち”はとってもむずかしいけれども、地域の方がたが教えてくれた“良いまち”へのおもいを共有することで、ぼくも未来につないでいき昨日より今日が安全で、昨日より今日がまちがきれい。毎日のちよつとした努力の積み重ねで、昨日より良くなつていく未来があるのだなと思いました。小さなごみひろいからでも、みんなで協力して取り組んでいくことで、おもいが広がり“より良いまち”になると思います。

〈講評〉

自分たちが理想としている「良いまち」が続いている理由をしっかりと考えることができている作品です。地域の方がそうじをしてくれたり、笑顔であいさつをしてくれたり、見守ってくれたりしてくれるおかげで「良いまち」がつけられているということに気付くことができましたね。そして、まちの一員として地域の方々と思いを共有し、その思いを未来へとつなぎ、みんなで協力していくことはとてもすてきなことです。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「言葉のバリアフリーと少しの勇氣」

間門小学校 五年 柳内 源万侶

ぼくの家の近所には、「三ヶい園」という人気の観光スポットがあります。春にはお花見ができたり、秋にはお月見ができるイベントがあったり、よく外国人を見かけます。

ぼくは三ヶい園のバス停で、市営バスの運転手さんが、間ちがえてバスに乗ろうとしていた外国人に、

「このバスは横浜駅行きではないよ。」

と英語で案内をしているところを見たことがあります。英語で案内をしたバスの運転手さんにもおどろきました。あの外国人がちがうバスに乗らずにすんで良かったと思えました。父や母にそのバス停について聞いてみると、良くバスを利用する人でも間ちがい易いバス停だと教えてもらいました。

本牧の町を見わたしてみると、高速道路や道路にある案内用の看板に、日本語以外にも英語やハンブル、中国語で書かれているのを見かけます。ぼくも以前旅行に行った外国の地で、日本語の看板を見かけたことを思い出し、ぼくの町でも外国でも観光客をもてなす良い工夫がされていることに気が付きました。

しかし、大まかな場所だけでなく、もつとピンポイントで必要な場所に多言語の表示が使われるようになると、もつと外国人にもわかりやすくなると思います。すぐでもそのようになると良いと思いました。

また、ぼくは公園で友達と遊んでいた時に外国人に道を聞かれたことがあります。その時、かた言の日本語とかた言の英語でやり取りをして意味が通じたのでうれしかったことを覚えています。ぼくは無事にその人が目的地にたどり着いたら良いなと思ったと同時にもつと上手にコミュニケーションが取れるようになりたいと思いました。次からは、外国人が困っていたら、言葉は上手には話せないかも知れないけれど、話せないなりにジェスチャーなどの工夫をして、はずかしがらずに道などを教えてあげたいです。

ぼくはこのような経験から、言葉のバリアフリーを意識することと、少しの勇氣を持って積極的にコミュニケーションを心がけることが、本牧をもつと良い町にするために必要なことだと考えました。実現のために大事なことは、だれにでもまずあいさつをすることです。なぜなら、あいさつをすると、困ったことを伝えやすくなったり、話題が広がったりと、きっかけを作りやすくなるのではないかと考えたからです。そして、この町の人やこの町をおとずれる人の笑顔を増やしていきたいです。

〈講評〉

本牧のまちに住む人や訪れる人の笑顔を増やしていくためにどうしていけばよいか、実験から考えることのできている作品です。言葉は分からなくてもジェスチャーで伝えることはできます。言葉のバリアフリーを意識し、勇氣をもつて行動することが大切だと私も感じました。誰に対しても積極的にあいさつをすることで、相手とつながることができるようになり、よりよいコミュニケーションにつながっていくと思います。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「ゴミの広がり防止作戦」

横浜雙葉小学校 六年 朝倉 嘉音

私は、学校の近く、中区に住んでいます。静かな家の周りが大好きです。けれど、登下校中に目障りな物があります。それは、「ゴミの広がり」です。きちんと、袋の中にゴミを入れて捨てているのに、カラスがゴミ袋に穴をあけてしまうのです。そのゴミが広がってしまい、通行を妨げる場合があります。その多くのゴミの種類が「生ごみ」なのです。ただでさえ、ゴミを回収するのに大変なのに広がったゴミを片付けるとなると、もっと大変だと思います。

そこで考えたのは、「カラス撃退作戦！」ではなく、ゴミを減らす運動です。なぜ、ゴミを減らす運動をするかというと、そもそもゴミを少なくすればこのような事は起きないのではないか、と思ったからです。

生ごみは、水分がたくさん含まれているため、焼却時にCO₂が多く発生してしまいます。そして地球温暖化が進んでしまいます。私は、環境問題について前から調べているので、今地球はとても危険な状態であることが分かります。それを防ぐために、今世界でも使われている、「コンポスト」というものを使います。「コンポスト」とは、家庭から出た生ごみや、葉っぱなどがある土と混ぜ合わせて微生物の働きを利用して発酵・分解させて、よい肥料が作られる、というスーパーマシナリーです。私の家でもコンポストを使っていますが非常に便利です。燃えるゴミの重さが軽くなった気がします。私は、コンポストを持っている人はコンポストを使って、無い人のために、何か所かにコンポストを置いて、そこに自由に捨てられるという案を考えました。そうすると、生ごみが減り、肥料が作られるので野菜作りもでき、野菜栽培などのイベントを開催して、地域の人達のふれあいもすることが出来るので一石三鳥です。そして、カラスがゴミを広げることがなくなるので、一石四鳥といってもおかしくないかもしれません。

これを読んでくださっている皆様は、コンポストで作った肥料で何を育てたいですか。この肥料で、少し難しい植物の栽培も出来るかもしれません。私は、今まで育てられなかった植物や、どこも育てたことのない植物にチャレンジして、有名な街になったらなと思います。

この中区を、環境に良い場所、そして地域の人達のふれあいの多い場所にしたいので、私たちにできることは、ゴミの広がりが気になって分かった、このゴミをなくす作戦だと思います。少しでも、よりよい街になるように、自分が呼びかけ運動をしたり、友達に広げたりして、中区、そして神奈川県と、どんどん広がっていったらいいなと思いました。そして、言うだけで動かないと意味がないので、どんどん積極的に動こうと思います。みなさんも、一緒に地球を救うために行動してみませんか。

〈講評〉

自分の住んでいるまちを、環境がよく、地域の人々とのふれあいが多い場所にするためにはどうすればよいかを考えている作品です。登下校中に気になったごみの問題から考えを広げることができています。ごみの広がりを解決するためには、コンポストを使えばよいことが分かりました。よりよいまちにするために、自分にできることをすること、それを呼びかけることが大切だと述べることができました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「二人一人の心があたたかい町へ」

間門小学校 六年 石田 紬

私は、この町をより良いところにするために地域の人たちとのかかわりを大切にしたいです。

最近、通りすがりの人たちのあいさつが減ってきて町の空気が暗くなった気がします。そしてこのままだと町の人はほとんど話さず通りすぎて行ってしまうと思ったのでこの町の活気を取りもどすために次のことをやってみようと思います。

一つ目は、「自分から元気にあいさつ」です。人からあいさつをしてもらうととても良い気分になります。私もこの間あいさつをしてもらってとっても気持ちよかったです。なのでこれからはあいさつをしてもらって、私たちが先にあいさつをして、町の人の暗くなってしまうた気分を元の明るい気分に取りもどしていきたいです。

二つ目は、「地域の人たちとラジオ体そうで交流する」です。今年はなくなってしまうのですが、私の地域では夏休みの間ラジオ体そうをやっています。そのラジオ体そうがあるたびにラジオ体そうに行っていたのですが年々人が減ってきてしまっている気がします。そこでどうしたら地域の人たちがラジオ体そうにきて、交流できるか考えました。そして、一人一人が近所の人をラジオ体そうにさそえばいいんじゃないかなと思いました。なぜなら、友達とかにさそわれるとうれしいからです。この間学校の休み時間に何をしようかとなやんでいると友達がドッチボールにさそってくれてとってもうれしかったです。だから、これからラジオ体そうに行くときは自分から進んで近所の人や友達をさそって、もっと交流を深めていけたらいいなと思います。

三つ目は、「地域の人たちのお手伝い」です。以前、私の地域で行われているおみこしの手伝いをして、

「ありがとう。助かったよ。」

と言われてがんばって良かったなと思っただけです。そのため、地域の人たちのお手伝いをこれからも続けて行って地域の人たちを助けてあげたいです。そしてお手伝いを通して関わりを深め、みんなの心があたたかい地域にしたいです。

私はこの町を心があたたかい町にするために、自分から笑顔であいさつしたり、ラジオ体そうにさそったり、お手伝いをしてこの町に活気を取りもどしたいです。

〈講評〉

自分の住むまちを温かいまちにするために自分にできることを考えることができている作品です。「自分から元気にあいさつ」をすることで、自分も相手も明るい気持ちになります。「地域の人たちとラジオ体操で交流する」「地域の人たちのお手伝い」というのも、コミュニケーションが増え、とてもいいと思います。自分にできる方法で、地域の方々との関わりを深め、温かい地域をつくる第一歩にしてください。

☆☆☆銅賞☆☆☆
「障害の壁」

立野小学校 六年 長谷川 楓

みなさんはもし、障害者の方に話しかけられたらどうしますか。私は何もすることができませんでした。

私は毎年近くの公園でひらかれる障害者の方達が計画しているバザーに祖母と一緒に参加しています。初めての時は、勇気がでず、一人で何も買えませんでした。その時点で、障害者の方を差別してしまっていた自分がとても情けなく感じました。翌年のバザーにも祖母と一緒に参加しました。その時に祖母が「このキーホルダーを二つください」とレジ係の小さな女の子に言っていました。そのキーホルダーは私にくれました。そして、もう一つはレジをしていた女の子にプレゼントをしていました。私は、その光景を見て、とてもおどろきました。

結局その日も何もできずに帰りました。でも、バザーはもう一日ありました。私はどうしてもあのバザーで何か物を買って、少しでも障害を持った子供たちと一緒に話したいと思ったので、次の日は一人で会場に向かうことにしました。それでもやっぱり少し不安でした。でも、出発する前に祖母が私に向かって「大丈夫。安心して行っておいで」と言葉をかけてくれたのを思い出したので、勇気をだして、昨日のレジの女の子に話しかけることができました。その女の子とはしばらく遊びました。そして、帰る時に女の子が私に、「バイバイ、ありがとう」と言ってくれました。私はそれを聞いてとつても心があったかくなりました。私はその日から近所の障害者の方達が集まる場所で障害を持つ子供たちとたくさん遊ぶようになりました。みんなとつてもかわいい笑顔で楽しく遊んでいます。

私はこのような「みんなが笑顔で幸せ。」という瞬間をもっとたくさん増やしたいです。みなさんは「ノーマライゼーション」という言葉を知っていますか。ノーマライゼーションとは、障害の壁を取り除き、みんな私たちと一緒に。という意味です。障害というものはその人が持ちたくて持ったものではありません。それなのに、私たちが勝手に差別したり偏見をつけたりして、その人の心を痛め、傷つけてしまっています。そんなことが本当に許されても良いのでしょうか。私は絶対に、許されることではないと思います。なので、私たちの町をよりよくするために、いろいろな人と関わり、受け入れ、助け合うことが大事だと思います。みなさんはどう思いますか。

〈講評〉

障害のある子どもとのバザーでの関わりから自分が感じたことを書くことができています。勇気を出して話しかけることで仲よくなり、交流が広がったことが伝わってきます。「みんなが笑顔で幸せ」という瞬間をもっと増やすために、「ノーマライゼーション」の考えを大切にし、すべての人々が明るく過ごすことのできるまちをつくるっていくことはとても大切ですね。

中学生部門

☆☆☆金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）☆☆☆

「変えたい未来」

仲尾台中学校 二年 嶋本 咲花

この時期になるといつも考える。あと五年後に、選挙権を持つが果たして私達の世代はどのくらい選挙へ行くのだろうか。五年後、「やっとな選挙権が持てた。」と嬉しくなる人はどのくらいいるのだろうか。今の私は大人が決めることに従うしかないが選挙権を持てば、「こうなってほしい。」と思う社会になるかもしれない、言わば、「願いが叶うかもしれない特別な切符をもらえる」と選挙のことを考えている。そんな特別な切符を絶対に無駄にはいけない。母は「中学校も給食がいいな。」と言い、祖母は「毎月通院しなければいけないからお金がかかる、無償化にならないかしら。」と言う。私はこのようなことでも社会のことを考えているのではないかと思った。自分の意見があるということはもしそのような政策があった場合、投票に行く。ということになる。「選挙」と言うとハードルが高い気がするが、実は日常会話の中でこういった話が選挙へ繋がっているのではないか。

私は中区が大好きだ。緑豊かで公園もたくさんあり、港町らしい風景が広がっていて観光名所もたくさんある。中学校にはクーラーが設置してあるため涼しい教室の中で勉強ができる。毎日当たり前のように過ごしているがこの住みやすい中区を作ってきたのは「こうしよう」と意見をあげてくれた方たちのおかげだと思ふ。この環境を維持できるか悪くしてしまうのかは未来の私たちにかかってくる。選挙は良い社会を守ることになる。他人ごとではないと気付かなければいけない。そして今よりもっと良い社会を作り、その先の未来も考えたい。

新型コロナウイルスの影響で社会にたくさん影響が出た。神奈川県は独自の対策「神奈川モデル」で取り組んでいる。万が一、感染したらどうすればよいか気になり、ホームページを見ると感染しても安心して治療できそうではあった。自分の住んでいる街を知ることが大切だと改めて感じた。

夏休み中、動画サイトで「選挙」と調べると投票の仕方や、投票所の様子、立候補者たちの動画があった。とてもわかりやすく、ポスターとは違った一面が見れて興味を持った。インターネットがある時代だからこそできることで選挙に対する考えが広がった。五年後にはもつと時代が進み、選挙の方法も変わるかもしれない。変わってはいけないものは、自分の住んでいる街でより良い社会で暮らしていくこと。選挙へ参加し、自分の意志を持ち続けることではないだろうか。

〈講評〉

二〇二〇年は、五月まで一斉臨時休校となり、皆さんにとっても、特別な一年だったと思います。そのような中、たくさんのお友達がこの「選挙作文コンクール」にチャレンジし、素晴らしい作品を寄せてくれたことに感謝します。

この作品からは、日頃感じる夢や願いの実現を投票行動と結びつけるなど、選挙制度への深い理解が感じられるとともに、新型コロナウイルス感染症のことを調べたうえで、筆者の考察や意見を伝えており、「選挙」を通して社会の知識を広げた筆者の成長に心が動かされました。また、たっぷりの地域愛を感じる描写で、地域の未来への思いが良く表現されていました。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「明るい未来のために」

横浜雙葉中学校 三年 石井 凜

現代では当たり前のように、一八歳以上の人にある選挙権。しかし、この背景には投票したくてもできなかった人、投票するために必死で闘った人、さまざまな先人たちの思いと苦労があった。

しかし、現代の日本は投票率が低い。戦後九〇%をマークしたこともあったが、四〇〜五〇%台と減少している。

そして、少子高齢化の影響で若い世代より高齢の世代の人口の割合の方が多い。また若者の投票率も低い。そのため、政治家は選挙に勝つべく、高齢者に不利にならないように年金や地球温暖化などの問題を放置し、若い世代や将来の世代にツケを回している。

それなのに二〇代三〇代の投票率は三〇%台と、六〇代の六〇〜七〇%台より格段に低い。

なぜ、投票率はこんなにも低いのか。

選挙に行かなかった一八歳から二四歳の人の理由は、「面倒だったから」(三〇%)「選挙にあまり関心がなかったから」(二八%)「どの政党や候補者に投票するべきかわからなかったから」(二〇%)が上位を占めた。

私も最近まで、彼らと同じような理由から将来、積極的に投票に行こうとは思っていなかった。

しかし、感染症の影響で家にいる時間が多くなり、国会中継を見たら、政府が質問に答えず言いたいことだけ言うという場面も見受けられ驚いた。また、政府の決定で急に休校になったり、アベノマスクが配られたりと政治と私たちの生活は密接に関係していることがわかった。このまま政治に無関心でいてはいけないと思った。

そのため、今年の都知事選挙では、選挙公報や新聞、ニュースやネット上での候補者の演説を見て、どんなことが選挙戦で繰り広げられているか積極的に調べた。すると知れば知るほど候補者の公約にはたくさん違いがあることが分かった。また、論点になっていいる事柄を詳しく調べることによって、政治や選挙に興味湧き、自分の意見も持つようになった。そして、早く選挙権が得られる一八歳になって、少しでも自分の意見を反映してくれる候補者に投票したいと思った。

そうやって、皆が政治や選挙について調べて考え、それぞれの意見を持ち投票をすれば、日本がより良いものになっていくだろう。逆にこのまま年月が過ぎてどの世代も投票率が低くなってしまったら、日本の政治家たちは国民に見られていないと思つて緊張感が欠け、国民のための政治をしなくなってしまう。そうならないためにも、第一歩として、特に若い世代が政治に関心を持って積極的に参加して欲しい。

参考文献 公益財団法人「明るい選挙推進協会」 www.akaruisenkyo.or.jp

〈講評〉

自宅にいた時間が多くなったことをきっかけに、政治に関する番組や新聞を目にする機会が増えたという筆者。コロナ禍の私たちの生活が、政治と密接に関係していることを実感します。自分から進んで政治に参加するという意識をもつことで、各候補者の公約の違いを理解したり、自分の意見を反映してくれる政党はどこかを見極めたりすることに繋がる。国民のための政治を行うには、まずは私たちの意識が重要なのだと気づかされました。

「投票の意味」

横浜雙葉中学校 三年 中島 由佳

新型コロナウイルスが猛威を振るう中行われた東京都知事選。投票率は55%。この数字を多いと捉えるか、少ないと捉えるかは人それぞれだと思う。私はこの数字が発表された時、民主主義の現代社会で投票の権利があるにも関わらず、投票に行かない人が二人に一人いる事実がマイナスな気持ちを抱いた。なぜ選挙の投票率が低いのか、年代別の投票率が低い若者たちが悪いのか。今回の選挙では感染が怖いとの理由も多いと思うが、投票率が低下し続けている選挙事情は確かである。

実際、投票に行かなかった理由の中に「興味が無いから」というものが多くあった。自分の一票は影響ないだろうとの気持ちから少なからず人の心にあることも間違いない。実は私も小学生の頃は両親の選挙に付き添い、毎回楽しく選挙会場に足を運んでいたが今では留守番。三年後には一票の重さを感じているかと言われると不安である。

投票に行かなかった別の理由に「行きたくても行けなかった」とあった。小さい子供がいるから、仕事で時間が無いから、体調が悪いから。新聞に記載されていた期日前投票立会人を務めた方へのインタビューでの言葉。「体の不自由な方を含め、投票所に来るだけでも大変と思われる方々が投票用紙と向き合う姿に感銘を受けました。」投票所の様子を自分の目で見た方の話は私の胸に刺さった。様々な人が政治に参加することこそ民主主義である。駅やコンビニなど気軽に参加できる場所を投票場の一つにすることや、入院している方、高齢の方のために代理人制度を単純化することで投票率が上がるのではないかと私は感じた。

しかし、ここで私は疑問を持った。投票率を上げることがより良い日本作りに本当に繋がるのか。投票したいのに行けない実状や、政治に意見はあるが行くのが面倒という自分の都合しか考えない心持ちは改善すべきである。だが投票しない人の中には「あえて」という人もいるのではないか。「今の政治を信用することが出来ない」「自分の大切な一票を入れるのに適した政治家がいらない」などの意見も実際あった。選挙は自分の一票を無理にどこかに入れれば良いというものではないだろう。「選挙」を辞書で調べてみると「ある任にあたる人を選出すること」と書かれている。日本の未来を委ねられる政治家や政策が溢れていれば、自然と投票率は上がるかもしれない。しかし民主主義である以上、誰かに政治を任せるために投票には行く必要があるとも感じる。投票率を上げることが目標ではなく、日本をより良くするための一つの通過点であると思う。多くの人が関心を持つ、分かりやすくかつ信頼される政治を作っていく政府と、自分から積極的に政治に関わっていく国民が一つになってこそ意味のある日本の民主主義の姿だと思う。自分に今出来ること。それは三年後に控えた選挙について知り、少しでも政治や社会情勢に関心を持つことだ。

〈講評〉

「投票率を上げることがより良い日本作りに本当に繋がるのか」と、投票の意義を根本から問うた作品。年々減少する投票率の背景と理由を探り、「投票率を上げる」とは目標ではなく通過点である」と主張する筆者に、これからの社会を担う若者としての気概を感じました。三年後に選挙権が与えられる中学生たちに、政治や選挙に関心を持ってもらうよう、大人たちが働きかけをしなければならぬのだと痛感しました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙への一歩は四年後の私へ」

仲尾台中学校 二年 飯嶋 柑音

放課後の部活帰りの帰り道の時、横浜市長選挙の立候補者のポスターが大きく貼り出されていた。立候補している人が沢山いた。それぞれの人を見比べてみると、一人一人が全く違っていた。それぞれの個性があり、見た目から惹きつけられる印象もあった。この人は優しく、真面目そうだな。とか、この人は逆に怖そうだな。などと見比べてみると面白かった。少し前だったら、スルーしていたポスターを一通り見て、私は家に帰った。

二〇一六年（平成二十八年）に公職選挙法が改正され、それまでは満二十歳以上の人に認められていた選挙権が、満十八歳以上の人にも認められるようになった。私は今、十四歳だから、四年後には私も選挙権を得る事が出来る歳になる。

その事に私は「はっ」と気づいた。四年後の自分を思い浮かべてみた。大学受験に向けて、勉強を頑張っているのかもしれない。それとも、どこかでバイトしているのかもしれない。このまま漫然と過ごしていたらどうなるのだろうか。候補者をしっかりと選ぶ事が出来るようになった四年後の自分が、まるで想像出来なかった。少し不安を感じた。

私はこれからの事を考え、選挙のたびに意識して行っている事がある。それは、自分だったら誰に投票するかを考える事だ。新聞やインターネットを通して、意識的に各候補者の情報を得る事はとても大切だと思う。その候補者の人柄や魅力を伝えてくれるのがどんな情報かは、実際に様々な情報を集めてみないと分からない。自分以外の人からも意見を聞くのも大切だ。私は選挙があるたび、候補者について家族の意見を聞いて、話し合ったりしている。

選挙について考えるようになる前は、見た目だけで「この人良さそう」と考えていたり、公約を見て「あ！この公約良い！」という考えしか出来なかったけれど、話し合うようになってから、「この公約はどこまで実現可能なのか」など、様々な視点でポスターの内容をみる事が出来るようになったと、自分で実感出来るようにもなりました。

その分、以前よりも、選挙で一票を投じる事は簡単ではないと感じるようになった。公約の内容をしっかりと見る事も大事だが、それが実行力を伴っているものかどうかは、もっと重要なものではないだろうか。そうだとすれば、「理想の公約」と候補者たちの「実行力」を、どうやって見極めていいだろうか。

結局、私は毎回候補者の中から「この人が良い」という人を絞り込む事が出来ないまま毎回選挙は終わってしまう。まだ一人を選べるところまではきていないが、選挙について考え始める前とは違い、選挙というものが身近に感じられるようになって来たと思う。これは、私が選挙権を得る四年後への、大きな一歩ではないだろうか。みんなの一票が町をより良くする一歩へと。

〈講評〉

たまたま目に飛び込んできた市長選のポスターから、四年後に控えた選挙権の獲得を自分事としてとらえ、自分から選挙に関わっていかうとする姿勢がうかがえます。今の段階で自分にできることは何か、この先どんなことが必要なのか、多角的にとらえています。その中で、一票を投じる責任の重さを実感したという筆者。このような若者一人ひとりの声が、町づくりを支えていくのだと感じました。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「一票の重さ」

横浜雙葉中学校 三年 岩田 澄夏

私がまだ中学校に入学したばかりの、中一の春のことだった。下足室の掲示板に貼り出された生徒会選挙のポスター。立候補者の名前の横に、赤字で集計結果が書き込まれている。ふと足を止めて眺めていると、見慣れない単語が目飛び込んできた。「無効票」の三文字だった。

無効票とは、公職選挙法の規定で、白票のほか、所定の用紙を使わなかったり、候補者以外の氏名や判読できない文字などを書いて投票されたりして、無効になってしまう票のことだ。思い返してみると学校の選挙の投票用紙には必ず「マル以外の記号は無効とします」と注意書きがなされている。また、近頃の選挙の傾向として、投票率が著しく低く無効票の割合が高くなってきている、というのがあった。二〇一九年四月に朝日新聞社が過去四年間の全国の地方選挙を分析した結果によると、無効票の割合は平均約二パーセントで、三十パーセントを超えた選挙もあったとのこと。

私が初めて「無効票」という言葉を目にした生徒会選挙の集計結果にも、四十票近くの無効票があったことに驚愕したのを今でも覚えている。何回も学校での選挙を体験してきたが、その数字が減ることはあまりなかった。

では何故そんなにも無効票が多いのだろうか。私はただ投票の仕方を間違えてしまったという理由以外に、二つの原因を考えた。

一つ目は、面白半分投票する人がいることだ。適当に候補者名を書き、適当にマルをつける。おまけに余白に余計なことを書く。特に学校の選挙では、そのような人たちが一定数いるのではないかと思う。

二つ目は、候補者について何も分からないがゆえに、誰も投票する人がいない、と白票を投じてしまう人がいることだ。選挙に行かなければいけない、というただの義務感により生じるのではないか。特に若者に多いパターンなのかもしれない。

二つの原因に共通して言えるのは、「選挙（政治）に興味がない」ということ、「自分が投じる一票の重みを分かっていない」ということではないか。自分や周りの人々がより良い社会で暮らすことができるよう、候補者の掲げる公約や演説を良く聞いてから投票所に向かう。そして自分の貴重な「一票」がきちんと反映されるよう、誠意を持って投票する。実際に、数票差で当選と落選が決まった例もある。老若男女関わらず、自分のオピニオンを選挙を通じて自分のためにも社会のためにも発信する。それが、社会の一員として私たちに与えられた役目なのだと強く思う。

私もあと三年で十八歳。「一票の重さ」を噛み締めながら、社会に生きる一人の人間として、役割を全うしたい。

〈講評〉

学校の生徒会選挙の集計結果に、「無効票」の言葉を見つけた筆者は、その数の多さに驚愕します。その理由を探り、一人ひとりの「一票」がいかに重要なものであるかを強く訴えてかけています。投票権を持つということは、社会の一員としての責任を持つこと。「無効票」を軽く受け止めてはいけなさと警鐘を鳴らしているようです。選挙権を得る三年後まで、「社会に生きる一人の人間として、役割を全うしたい」と誓う筆者に、期待を抱かずにはいられません。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙のためになすべき事」

仲尾台中学校 三年 斎藤 ほの花

冬が近づくと、私たちの学校では、ある行事のための活動が慌ただしく始まります。それは「生徒会役員選挙」です。この選挙は、学校をより良くしてこうとする気持ちが溢れている、これからの学校生活を充実させるための大切な行事です。私はこの作文を書くにあたり、改めて選挙の役割や、これから私達が取り組んでいくべきことなどについて考えてみました。

昨年、私は一年生の頃から所属していた広報委員会の委員長をやってみないかという話をもらい、すぐにやりたい!と思いました。自分がリーダーシップを取ってみんなをまとめられるのかという不安もありましたが、自分自身をさらに高めたいと思い、選挙で演説することを決意しました。また、生徒会に入ることができれば、委員会活動だけでなく、学校の運営にも携わることができると思います、ますます委員長になりたいと思います。

そして迎えた選挙当日。緊張で声が震えそうになるのを必死で抑えながら、私は無事に演説を終えることができました。後日、当選者が発表され、私は正式に広報委員会の委員長を務めることが決まりました。その時の達成感や喜びは今でも忘れられません。

一年生の時は先輩方の姿に憧れ、「すごいな」と思いながら選挙の投票をしました。二年生の時は自分が投票される側になり、不安を抱きながらも私なりのベストを尽くした結果、当選することができました。そして今年。最高学年となった私は気持ちを新たに選挙に臨みます。これからの学校を支えていく後輩達に責任を持って投票し、さらに素敵な学校を作ってほしいと思っています。

私はこれらの経験を通して、選挙は、一人一人の意見を反映させる、数少ない貴重な機会であり、個人個人が責任を持って投票することで意味をなすと改めて感じました。

現在、中区を含んだ横浜市全体の投票率は著しく低下してきています。つまり、せっかくの政治に関わることができるチャンスを逃している人が多いということです。私は三年後に選挙権を持ちますが、普段は関わりが少ない政治に自ら意欲的に参加したいと思っています。中学校での経験を生かして、自分の投票に責任を持ち、少しでも中区や横浜市の町づくりに貢献したいです。また、自分や、自分よりも若い世代のためにも投票をして、将来の暮らしをより充実したものにしていきたいと考えています。このような思いを持つ人が増えれば、投票率もきつと上がるはずですが。そのためにも私は、未来を見据えて自分のなすべきことに取り組み、演説をしたあの日のような気持ちを持ち続けたいです。

〈講評〉

筆者は中学校での生徒会役員選挙に立候補し、広報委員長として活動する中で、「選挙」というものに興味を持ち始めたといえます。筆者が生徒会選挙に向けて、こつこつと準備を重ね、熱い思いをもって生徒会活動にひたむきに取り組む姿が、文面から伝わってきました。そして、そこに本来の選挙のあるべき姿を見た気がします。よりよい学校（社会）を作りたいというまっすぐな思いを、これからも自分の軸にしてほしいと思います。

審査をふりかえって

小学生 A 部門では、そのみずみずしい感性と素直な心でとらえた「わたしのまちのすきなところ」が、魅力あふれるところとして紹介されていました。それは、例えば歴史ある「わき水」の存在であったり、「なつまつり」の楽しさであったり、「マリントワー」の思い出であったり、日常の中で大人が見過ごしてしまっていた大切なものを、子どもらしいまっすぐな気持ちで見つけて教えてくれました。そこにあるのは、自分の住むまちに対する誇りそのものでした。そこに住む人たちとのすてきなつながりでした。

小学生 B 部門では、「より良いまちをつくるために私たちにできること」を真剣に考え悩み、答えを導きだそうとする子ども達の姿がありました。大好きなまちだからこそ見逃せない問題があります。「ゴミ」のこと、「言葉の壁」のこと、「障がいの壁」のこと、……誰かの「困った」を解決することから始めるまちづくり、理想とする「良いまち」をめざす子ども達の熱い気持ちが伝わってきました。周りの人たちとのふれあいを通して、その中で自分が今できることを自分なりに考えて具体的に行動に起こそうとする姿を頼もしく思いました。

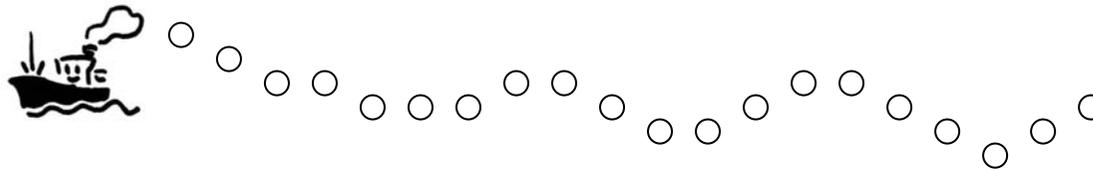
中学生部門では、さまざまな方面から「選挙について考える」将来の有権者たちの姿がありました。選挙権年齢が18歳に引き下げられたことにより、中学生にとっても選挙は遠い未来の出来事ではなく、身近なものとして考えなければいけないことであり、行動しなくてはいけないこととして捉えられていました。「投票率」の低さに対する警鐘を鳴らしたり、世の中を変えていくために投ずる「一票の重さ」を考えたり、「投票の意味」を根本的などころから考え直したり、いかにして世の中を良くしていけるのかを真剣に考えた作品が多く、選挙権をもつことの責任の重さや大切さを真摯に受けとめていることに感銘を受けました。

今回の作文を執筆したすべての皆さんに大きな拍手と称賛を贈ります。コロナ禍でこれまでとは違う「新しい生活」を強いられてきた2020年。希望を失うことなく未来を描く皆さんの姿は、暗闇を照らすひとすじの光となりました。「この先の未来」に向けて、ともに力を合わせていきましょう。



■作品の選考・講評■

横浜市立山元小学校教諭	小島 早紀
横浜市立みなとみらい本町小学校教諭	一色 恵
横浜市立本牧中学校教諭	天野 祥子
横浜市立本牧中学校教諭	前園 奈央子
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	大村 崇夫
横浜市中区選挙管理委員会委員長	高島 清
横浜市中区長	直井 ユカリ



第40回

中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集

令和3年2月発行

発行

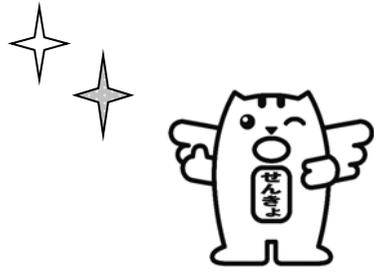
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所

〒231-0021

横浜市中区日本大通35番地

TEL 045-224-8117

FAX 045-224-8109

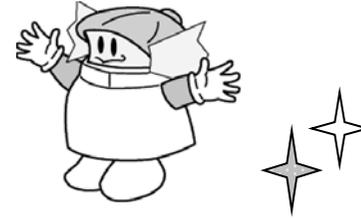


あか せんきよ
明るい選挙キャラクター
せんきよ
選挙のめいすいくん



©KUSUMI / GX and NAKA-ku

よこはましなかく
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきよ
横浜市選挙のマスコット
イコット Jr.